
埋もれ木に花咲く

あいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

埋もれ木に花咲く

【Nコード】

N4237U

【作者名】

あいな

【あらすじ】

父親との仲がうまくいかず、妹と家を飛び出し夜の街をさまよう百合。寝る場所を求めて声をかけた相手は父親と同じ会社員。迷った末に彼の家に居候させてもらう事になった。恋愛はのんびり進みます。

日常生活の次に 1

「ゆりお姉ちゃん!」

あと数か月で4歳になる向日葵ひまわりが、その姉にあたる百合ゆりに向かって体当たりで抱きついた。

一回り以上の年の差があるとはいえ、子供一人分の体重は馬鹿には出来ない。

「椎名しいなさん」

向日葵をおろして靴を履かせているとエプロンをつけた若い女の保育士が声をかけてきた。

向日葵のクラスの担当の先生だ。

「来週の水曜日は遠足ですのでお弁当を忘れないように妹さんに持たせてください」

桃色の頬は天然ではなくチークだろう。

化粧つ気のない百合でもそれくらいは分かった。

笑顔とともに渡されたプリントを受け取る。不意に目に入ったの指は爪の先まできれいに磨いてあって思わず目をそらす。

「じゃーまたね!ミカ先生!」

「また明日ね、向日葵ちゃん」

ゆるゆるに巻かれた栗色の髪をなびかせながらミカ先生は手を振った。

百合は自分の長い黒髪を軽くすくとため息をついた。

16歳、現役高校生でオシャレに興味がないと言ったら嘘になるけれど仕方ない。オシャレは お金がかかるのだ。

「百合おねーちゃん!」

「はいはい」

百合はさかむけてボロボロになった手で向日葵の小さな手を握った。

向日葵は嬉しそうに笑って腕を大きくブルンブルンと振る。

そんな向日葵を見て、百合も嬉しそうに笑った。

2人が帰ったのは向日葵の保育園から徒歩20分ほどの所にあるアパートだ。

このご時世にセキュリティのついていない、鍵ひとつで自宅に入る2階建ての建物である。

百合たちの部屋は1階の端にある六畳一間キッチンありトイレあり風呂ありで家賃4万円と破格だ。難点は駐車場がない事だが公共交通機関もそう遠くはないので浪人生に大人気のアパートだ。2階の全室は浪人生が占めており1階はお年寄りの割合が多い。

紛失防止のための大きいキーホルダーをつけている鍵を取り出し、勝手の悪い重いドアを開ける。

月末とはいえ、6月の空は不安定なので部屋干しをしている洗濯物がうつつとうしい　はずだった。

百合は朝家に出る前に狭苦しい部屋いっぱい洗濯物を干していた記憶がある。

だからそれはあってはならない光景だった。

洗濯物は散らかっていて、机の引き出しはめちゃくちゃにされたまま開いている。

台所のお皿は何枚か割れていて、向日葵はおるか百合でさえ吸ったことのない煙草の吸殻。

一瞬で悟った。

「うつつ……」

憤りが頂点に達した頭を向日葵の泣き声が割れに返す。握り拳をほぐし、ポンポンと向日葵の頭をなでてやる。

「大丈夫、怖い事はなにもないよ」

精一杯優しく。向日葵がこの気休めを信じるように。

荒れた部屋を軽く片づけ冷蔵庫を開ける。

ここまで被害は及んでいなかったものの、もともと大したものが入っていたわけでもなく簡単なものしか作れない。

今から買い出しに行く元気をなくありあわせで夕飯を作った。

向日葵の保育園での話を聞きながら夕食を終え、子守唄を歌いながら寝かしつける。

近所迷惑にならないように小声でだ。

可愛い寝息を確認すると電気を消して百合も寝る体制に入る。

こんな事になって何が困るかって、一番は警察に通報することもできないからだ。

犯人は身内

認めたくもない、どうしようもない父親なのだから。

日常生活の次に 1 (後書き)

しばらくは面白くとも何ともない
百合の「日常生活」です。

飽きずに読んでやってください笑

日常生活の次に 2

百合の両親そろつての記憶は、それはそれは微笑ましいものだ。

23歳の若旦那と21歳の新妻は仲が良かった。それは百合が生まれても変わらず、幸せな家庭だった。

百合が小学6年生、12歳の時、妹の向日葵が生まれた。

そして母は消えた。

消えた、という表現で正しいと百合は認識している。

家から突然いなくなった彼女の行方を父親は一切教えてはくれなかったのだから。

そこから壊れた。

父は仕事が軌道に乗り忙しくなっていた。

百合は反抗期真っ盛りでイラついていた。

生後まもない向日葵は母親の残像を求めて泣き続けた。

それでもまだよかった。父親は時間の許す限り帰ってきてくれた。

お金も家にいれてくれたし、ご飯も作ってくれた。

母が消えてから1年はそうやってすごした。

1年が過ぎたころから、父の態度が悪化した。

帰ってこない、ならまだいい。被害がないから。

大変なのは帰ってきた日の方だ。

家具は壊れる。食器は割れる。

百合を母親と比べて怒鳴る。

向日葵に罵詈雑言を浴びせる。

それだけ暴れれば普通のマンションでは苦情が出る。

百合が中学2年生の時、住んでいる所を追い出された。

新しい住まいは父親が見つつけてきた。それがそのまま今の家にな

る。

引越してからは父は全く帰ってこなくなった。

帰ってきてても今日のように2人がいない時だけである。荒れた部屋でその存在の訪問を知る。その時にはすでに「帰宅」ですらなくなっていた。

百合が中学3年生の秋から、父親は家賃、学費以外の入金をしてくれなくなった。

受験生だったが百合はバイトを始めた。3歳の向日葵は、まだ父親がマシだった時に保育園に入れてあったので心配なかった。

百合は志望校のランクを2つ下げた。

私立の特待をねらうのならばもう少しレベルの高い高校にも行けたが、そのために勉強する時間が受験前にも入学後にもなかった。卒業式に百合は父の姿を学校はおるか家でさえ見かけていない。

高校の合格通知をこれ見よがしにパンフレットと共に机の上においていたら、数日後銀行に入学金が振り込まれた。

けれど義務教育じゃないからか、学費は全額の半分しか払われなくなった。

百合はどんなに体がきつなくても真面目に授業を聞いた。奨学金を得るために成績は落とせなかった。

バイトは高校生になったので自給のいいものにかえた。

学校が終わってから向日葵の通う保育園が預かってくれる時間のギリギリまでの朝4時から6時半までの2つをかけもちしている。本当は深夜のバイトの方が条件はいいのだが、それでは都合が悪い。

こんなセキユリテイの不安な家にまだ4歳の向日葵を1人で一晩中置いておくわけにはいかない。

そのようにして百合の日常は形成されていった。

日常生活の次に 2 (後書き)

細かい金銭は気にしない方向で。

とにかく百合ちゃんは大変、父親は非道。

それが伝わればOKです。

日常生活の次に 3

嫌な夢だ。

朝、3時半に起きた百合はそう思った。

記憶とも事実とも違うわな夢。それは悪夢に近い。

すぐ隣では向日葵の規則正しい寝息が聞こえる。

百合は夢の住人の頭を優しくなでた。

小さい小さい、生き物。

百合はこの時間が好きじゃない。泣きそうになってしまっからだ。

「ひま

妹の愛称を呼ぶ。目を覚ましてしまわぬように、小さく。

比べるな、なんて無理な話だ。

重ねるな、なんてどうやって。

だって、私は幸せだったのに。

父さんは明るくて、母さんは優しく、あたたかい布団に美味しいごはん。

当たり前だったのに。

どうして、この子にはないの。

どうかひとつでもいい。どうかひとつでもあれば、この子はまだ救われる。

「…ん」

向日葵が寝返りをうって百合は我に返った。

瞳にたまった涙をぬぐう。

「…行つてきます」

バイトの時刻が迫ってきていたので百合は家を出る。早朝のバイトは駅のトイレ掃除だ。新聞配達でもよかったのだが、あれは体力がいる。

体力がいるということとは、お腹が減るということだ。

そんな理由から、新聞配達はやめた。

たいてい百合は一番乗りだ。その日もそうでそのまま着替え道具を携え現場に出る。

まだ始めて2か月程度なのだが手慣れたものでさっさと終わらせ7時には帰宅する。

向日葵はまだ眠っていた。

「ひま、起きて」

「ん」

「ひま」

ぐずる向日葵を起こし朝食の用意をする。

全国的に有名なコンビニではなく地元民でさえ聞いたことがないような名前のコンビニで仕入れてきた耳パンをとりだす。一袋がやたら大きくてそこにたくさん入っている。それでいてお値段100円なんとたったの1コイン。

もちろん店頭で堂々と売ってるわけではなくお得意様限りの裏メニューだ。

耳パンを角切りにし、チーズやキャベツを一緒にあえる。

「ごはんだよ」

「いただきます」

チーズが大好物の向日葵はさっきまでの眠気はどこへやらで美味しそうに食べ始めている。

身支度を整え向日葵の保育園の時間に間に合うように家を出る。

「ゆりお姉ちゃん、今日は何時にお迎え来れる？」

「そうだねえ、昨日と同じくらいかな？」

「やったあ」

向日葵が嬉しそうに飛び跳ねる。

「どうして『やったあ』なの？」

「そしたらマヤちゃんといっぱい遊べるもん！」

顔いっぱい笑顔を張り付けて向日葵は言った。百合と同じ黒くて長い髪が左右に揺れる。

「そっか、よかったね」

「うん！……！」

それは百合にとっても嬉しい報告だった。一日の半分以上を保育園で過ごすわけで、そこが楽しいというのならそれ以上のことはない。

「お願いします」

「はい。ほら向日葵ちゃん、お姉ちゃんに行ってらっしゃい言うおうか」

「行ってらっしゃーい！お姉ちゃんー！……！」

日常生活の次に 3 (後書き)

バイト情報は確かじゃありません

高校生で駅のトイレのバイトできるのか知らないし

そもそもバイトであるのかも知りません

体力を使わない、みたいな描写もありますがそんな事も思っていない
せん

不快な思いにさせてしまったらすみません

次話から百合ちゃん和学校生活になります

日常生活の次に 4

腕時計を見ると8時45分。向日葵の保育園へは余裕を持ったの登校だが百合は完璧に遅刻だ。

にも関わらず百合の足取りはゆったりとしたものだった。

走ればお腹が空くし疲れる。そんなのは寝不足の体に良くない。

百合の中では授業に間に合えば遅刻ではないのだ。

教室に入るとちょうど1時間目が始まる前だった。

もはや2ヶ月毎日のように行われた光景なので先生も生徒もなんの反応も示さない。

「もう少し静かに入れないのか」

この生活指導のハゲ頭をのぞいて。

「…まだ休み時間中ですので授業の妨げにはなっていないはずですが」

そう言い返すとハゲ頭の相川は小さく舌打ちした。

「席に着きなさい。それから昼休み職員室に来るように」

相川はそう言つと荒々しく「起立！」と怒鳴った。

ガタツと席を立った隣の男子がこれ見よがしにため息をつく。

お前のせいで相川の機嫌悪くなったじゃねえか

無言の言葉が確かに百合の耳に届いた。

そんなの知ったことか、と百合は教科書を開いた。

教師の機嫌が悪かろうがよかろうが、授業さえきちんとしてくれるなら百合には何の問題もない。

教師が生徒を叱れるのは質問に答えられない時か私語をした時だ。予習復習をして授業中黙ってれば教師の機嫌がいくら悪かろうと関係ない。

相川が黒板に連ねていく文字の羅列を理科しやすいようにノートをまとめる。

クラスメイトに良く思われてない事は知ってる。

地味のくせに遅刻の常習者。

休み時間は常に机に座って勉強し、放課後は誰よりも先に教室を出る。

この小さなコミュニティで輪を乱す者はのけられる。

かつては百合もその中の一人として生活していたのだからそのシステムはよくわかる、けれど。

そんな事、どうでもいい。所詮は小さなコミュニティ。

そんなものの調和よりももっと大切なものが百合にはあった。

「椎名！」

名を呼ばれ顔を向けると相川の憎らしい笑みと目が合う。

「ボーっとしているとは余裕だな。ならこの問題を解いてもらおうか」

出そうになるため息を押し殺して黒板の前まで移動し、正しい答えを記入していく。

相川はつまらなさそうに顔を歪め、そのあまりの露骨さに百合も不機嫌になる。

もう少しうまく仮面をかぶれないのか、仮にも教師だる貴様。

「仁科！問4の答えはなんだ！」

「えっと……ろくぶんのにーと？」

「アホかお前は！授業で何を聞いていたんだ！」

完全に百合のとばっちりを食らう羽目になった仁科は哀れにも授業終了まで相川に怒鳴られ続けた。

赤に近い茶髪やシルバーのアクセサリーも八つ当たりの対象にし

やすかったのだろう。

「災難だったねー京。誰かさんのせいでさあー」

授業終了後、わざと聞こえるような猫なで声が耳障りだったが無視する。

「誰かさんって？」

仁科はさも不思議そうに尋ねた。周りを囲む女子が「キヤー」と叫ぶ。

「何とぼけてんのぉ？それわざと？京ってザンコクー」

愉快そうに笑う甲高い声に仁科ははつきりと言い返した。

「本当に何言ってるのかわからないんだけど。だって間違ってる怒られただけの話じゃん。誰のせいって、俺のせい以外にありえんの？」

「困惑と笑顔を融合させた表情の仁科に、

「んもー！京らしいっていうか」

と評価が下される。

あほか。百合は一度だけそう思うと思考を切り替えた。

次の授業の予習と以前の復習。1秒たりとも無駄には出来ない。

そんな百合にとって昼休みに呼び出されるのは不満だった。

日常生活の次に 4 (後書き)

やっと椎名家以外のメンバーが…笑
道のりは長いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4237u/>

埋もれ木に花咲く

2011年7月6日03時17分発行